修士論文（要旨）
2009 年 2 月

母親の育児不安に関する母子画を用いての研究

指導　橋本 泰子 教授

国際学研究科
人間科学専攻　臨床心理学専修
207J5013
鴫原 依子

目次

１．問題・・１
２．仮説・・１
３．方法・・１
４．結果・・１
５．考察・・２

１．問題と目的

近年、核家族化、少子化など育児中の母親を取り巻く環境は大きく変化している。乳幼児を持つ母親にとって育児は生活の大部分を占めるものであり、家族形態の変化や育児知識の伝承の無さなどから育児不安はますます高まっている。

本研究では母親の育児不安と不安を高める要因として多く挙げられる、父親の育児参加や母親自身の養育体験、自己肯定感との関連を検討する。また、母親自身が意識化していない、一側面を捉えるために、母親の内在化された自己や他者が投影されると示唆されている「母子画」を用いて、育児中の母親について明らかにすることを目的とする。

２．仮説

１．育児不安が高いと自己肯定感が低い。

２．育児不安が低いと他者への信頼が高い。

３．育児不安が低いと母子画の表情に笑顔が多い。

４．育児不安が高いと母子画の母と子にアイコンタクトが見られない。

３．方法

調査対象は東京都内と福島県内の家庭支援センター、子育て支援センターに通う０歳～3歳までの乳幼児を持つ母親 138 名。有効回答数は 130 名(94.2%)。130 名のうち 20 名に家庭支援センターにてインタビューを実施した。調査時期は 2007 年 11 月～2008 年 7 月。調査内容はフェイスシート、育児不安尺度、自己肯定感尺度、成人版愛着スタイル尺度、父親の育児参加尺度、母子画。

４．結果

１)各尺度の相関

母親の育児不安と自己肯定感($r=.48, p<.01$)に負の相関が見られた。

２)各尺度と成人版愛着スタイル尺度

自己肯定感において回避群よりも信頼群の方が有意に高い得点を示した($F(2,125)=14.42, p<.05$)。

３)母子画と各尺度との比較

〔サイズ〕項目では父親の育児参加において母子画の母親サイズの小さいよりも普通・大きいの方が有意に高かった($F(2,125)=4.94, p<.01$)。

〔表情〕項目では AVOIDAND 得点において子どもの表情が後ろ向きの方が他の項目よりも有意に高い得点を示した($F(4,124)=4.65, p<.001$)。

〔アイコンタクト〕項目では育児不安においてアイコンタクトありよりも一方的なアイコンタクトの方が有意に高い得点を示した($F(3,125)=3.02, p<.05$)。

〔身体接触〕項目では育児不安において接触よりも非接触の方が有意に高い得点を示した($F(2,126)=3.44, p<.05$)。

５．考察

１)各尺度の相関

母親の育児不安が高いと自分自身への自信が低くなり、肯定的に物事を捉えることが少ないと考えられる。**母親の育児不安が高いと自己肯定感が低くなる**

ことから仮説１は支持された。

２)各尺度と成人版愛着スタイル尺度

各尺度と成人版愛着スタイル尺度各群との比較の結果、回避群よりも信頼群の方が自己肯定感が高かった。自己肯定感が高い母親の方が安定した成人愛着を形成できるとは、本来の自分の姿をあるがままに捉えられ、自然なままの姿で他者と関係作りをすることが推察される。**仮説２は支持されなかった。**

３)母子画と各尺度との比較

〔サイズ〕サイズ項目では母親のサイズのみに有意な差が見られた。小さいよりも大きい方が父親の育児参加が高かった。高橋(1974)はサイズが小さいことは自信のなさや劣等感など、サイズが大きいとは自己主張が強いことや活動的などと示唆している。サイズを大きく描く人は小さく描く人よりも父親へ育児参加して欲しいときちんと伝えられ、父親の育児参加が高まったことが考えられる。

〔表情〕項目では子どもの表情のみに有意な差が見られた。笑顔や非笑顔、といった他の項目よりも後ろ向きに子どもを描いた方が回避傾向が高いことが分かった。馬場(2005)は後ろ向きの絵は人に逃避的であり、自分の気持ちを抑圧する傾向があると示唆している。自分の気持ちを表出できない母親は、他者と深い人間関係を築きにくいのではないかと推察される。**仮説３は支持されなかった。**

〔身体接触〕接触項目では接触ありよりも非接触の方が育児不安が強いことが分かった。育児不安が高いと母と子の距離が遠くなる。馬場(2005)は身体接触で母と子がつながりを持つことは統合されていることを意味すると述べている。母と子の距離が遠く、統合されていないことは成熟した自我と inner child が一致していない状態にある。母親自身が不安定な状態であることが示唆される。そのために、育児への不安も感じやすいと示唆される。

〔アイコンタクト〕項目では、親子が共にアイコンタクトするよりも、一方的なアイコンタクトを送る方が育児不安の高いことが分かった。見つめ合う母子像は、成熟した母親である内的自己と自己の内なる子どもの親密な情緒的交流などと言われている。一方的なアイコンタクトは、母親と子どもの情緒的交流が乏しいと推察される。**母親の育児不安が高いとアイコンタクトが見られないという仮説４は一部支持されたと言えるだろう。**

母子画の項目の中で、育児不安との関連があった項目はアイコンタクト項目と身体接触項目であった。つまり、育児不安が高いと母子画において、母が子に、あるいは子が母に一方的な視線を送ることや、母と子の距離が遠くなることが分かった。

引用・参考文献

馬場史津 2005 母子画の基礎的・臨床的研究 北大路書房

ジレスピー・J 松下恵美子 石川元(訳) 2001 母子画の臨床応用―対象関係論と自己心理学― 金剛出版 (Gillespie,J. 1994 The Projective Use of Mother-and-Child Drawings a Manual for Clinicians. NewYork: Brunner/Mazel,Inc.)

早川滋人 2006 母子画(DBM)の基礎的研究 滋賀女子短期大学研究紀要,31 35-48

間三千夫 関根剛 中嶋和夫 2000 母親の育児不安感に関する構成概念のモデル化 信愛紀要,40 49-57

加藤邦子 2002 父親の育児かかわり及び母親の育児不安が３歳児の社会性に及ぼす影響：社会的背景の異なる２つのコホート比較から 発達心理学研究,13 (1),30-41,2002.

小塩真司 2006 自己愛と自尊感情が集団活動の自己評価および成員評価に及ぼす影響―２つの自己肯定感の対比― 日本パーソナリティ心理学会,15 90-91

久保田まり 1995 アタッチメントの研究―内的ワーキングモデルの形成と発達― 川島書店

牧野カツコ 中野由美子 柏木恵子 1996 子どもの発達と父親の役割 ミネルヴァ書房

松下恵美子 石川元 1999 母性意識と母子画に描かれた対人表現との関連について 臨床描画研究 43-55

レビィンソン･D.J. 南博(訳) 1980 人生の四季：中年をいかに生きるか 講談社 (Levinson,D.J. 1978 The seasons of a man's life Knopf.)

南里裕美 谷直介 2006 統合失調症患者における母子画の研究 教育科学セミナー,37 101-107

小野寺敦子 青木紀久代 小山真弓 1998 父親になる意識の形成過程 発達心理学研究,9 (2), 121-130.

櫻谷眞理子 2004 今日の子育て不安・子育て支援を考える－乳幼児を養育中の母親への育児意識調査を通じて－ 立命館人間科学研究,7, 75－86.

塩崎尚美 2005 保育者の母子分離に対する意識―母子画を用いた保育研修の内容から― 相模女子大学紀要,68 47-54

高橋雅春 1974 描画テスト入門―HTPテスト― 文教書院

琢摩武俊 戸田弘二 1988 愛着理論からみた青年の対人態度―成人版愛着スタイル尺度作成の試み― 東京都立大学人文学部,196, 1-16.

田中道弘 2005 自己肯定感尺度の作成と項目の検討 人間科学論文,13, 15-27.

田中和江 橋本紀子 2007 父親の育児とそれに対する支援の現状と課題―父親の労働状況と育児参加の実態からみる一考察― 女子栄養大学紀要,38 53-74